

912.3
ケ

出 世 利 也 子 弟

Vertical text on the right side of the page, possibly a date or location stamp.

元服曾我
と結成る

未
ふと浪りの秋をく
娘ととらふか

らふん
是ら曾我子即結成る

梅も身あはし箱王ら箱根の寺人の不

せそえいあふ細のの程は今日無きなり

元服ききせとわとほの
海影を君あて

明ら箱根山く
家もあふの影をひ



かのくとしがふ高きとらぬの流れ
電も時志の舞とく去夏秋とは美まじも
りる思旨の末通る心くらのれおとま
つまらぬ命かひんぐ 意の籠に
是らぐや箱根の寺に志えはいつれ
ま 深 山前め水 城ら子苗の山垣に
糸の葉う苗ひやい海うととやうくうま

海ら流ら山札やいひひつきたれ
今にあそなりりやえの籠に山札のこあ
あうりてら 丸別當 竹のたぐえあはあ
まらぐの籠に流心りくなくなる山札
今の流あゆ山あえたれ 思今葉葉
よのあはわす箱玉とえ腹のこあ
其のあらてら 丸 是らぐの山あふ

位は初ら箱王殿のいさすのち方殿
こととあやあやせとれらのあえの
とみんら母ゆくはあのとあす
くらん結成の方根からあせの
い^たやち方殿のきくの後たもいす
又何厚度別あくとあまじびよ
すよわくといまかまともあひ

程に扱うと師すれひのやくと
とくら何厚殿のいんくち方殿の
意とあかしくは結成らあせの
あしあ^とあまをあくら程の
のいさすといさあひのあす我
う親の懸れ事あはあくは九敵
勢があは別あはあせあす箱

敷と男のあづの根の懸とさるん
討きて結んくつど家の功德おほく
唯結成と出抜おます同巻下 権詢と
只をれし是れ之言茶も阿らうと
理りるれや痛らうと別あるも列の
人をもつた神とちりりもつと世世に
あうとく四考もつるん身れ向ぬ

常と限ありあゆぬかうつ命と皆
もつたは末遂て胸の煙も其名を
お苗とらぬにわひと兄弟も其亡跡
ことらもんく丸考とつらひと初
あまらつてはつはらびと山をゆらと
し丸考とつらひと考とつらひと考と
箱と殿の果と中とつらひとつらひと

かうんぐん徳の成成のいふふふ
らるは出あまこやくは徳のいふ
は盛くあまこやくの徳は成成の
は徳の余の徳はあまこやくの
あまこやくの徳は成成の
にゆく 箱王上 師道は徳の
ひめは徳のあまこやくの徳は成成の

乃成の事、成成獨の徳のあまこやくの
徳のあまこやくの徳は成成の
らるは出あまこやくの徳は成成の
は盛くあまこやくの徳は成成の
は徳の余の徳はあまこやくの
あまこやくの徳は成成の
にゆく 箱王上 師道は徳の
ひめは徳のあまこやくの徳は成成の

あれハ箱根とあり山名と箱根殿
と付今元服乃折送も師事此は
居く後々ハ同くハ心家とモさ
一尋とモつるセト後ハ元力のか
さるあり結成の事痛志が
持ふあり持ふたげハ意無の事
あハおまけハ義とひのりハ結成乃

影見あり持と別ありハ酌と
竹未と折ハ師事ハ兄事ハ心
さハ後ハあがハ箱根の海山ハ
同ハ心ハ^{カラ}年^ハ月^ハ日^ハを^ハひ^ハ急^ハと^ハ結成
人^ハ急^ハつ^ハ其^ハハ^ハ方^ハを^ハ今^ハハ^ハあ^ハら^ハん
影^ハ為^ハハ^ハ衣^ハ乃^ハあ^ハ校^ハを^ハあ^ハて^ハう^ハた^ハく^ハて^ハ海^ハ也^ハ
著^ハ之^ハの^ハ月^ハ乃^ハ盡^ハと^ハあ^ハる^ハり^ハ
^切時^ハ刻^ハを

今さらうらあはしう海にゆかん
知れははる梅の香ととあはも
有的のそあや名枝城人 北 名枝と
そおほまはれまのそ有津とれ 北 名枝
山も有るや 北 山はあはく兄才
日や口前よ 北 知行 内 名別あも事
月別に眠みまはるる息とん其跡と見

一 北 月 北 山 北 名 北 枝 北 城 北 人 北 名 北 枝 北 と
知 北 れ 北 は 北 は 北 り 北 梅 北 の 北 香 北 と 北 と 北 あ 北 は 北 も
有 北 的 北 の 北 そ 北 あ 北 や 北 名 北 枝 北 城 北 人 北 北 名 北 枝 北 と
そ 北 お 北 ほ 北 ま 北 は 北 れ 北 ま 北 の 北 そ 北 有 北 津 北 と 北 れ 北 北 名 北 枝
山 北 も 北 有 北 る 北 や 北 北 山 北 は 北 あ 北 は 北 く 北 兄 北 才
日 北 や 北 口 北 前 北 よ 北 北 知 北 行 北 北 名 北 別 北 あ 北 も 北 事
月 北 別 北 に 北 眠 北 み 北 ま 北 は 北 る 北 る 北 息 北 と 北 ん 北 其 北 跡 北 と 北 見

志ある家なるは、
神ありしは、
わらわしき家なるは、
かよふわらわしき家なるは、
あはれは、
ふたしく、
ゆへに、

自後とて、
詞けり、
神と志、
しと、
毛、
志親の、
ふと思、

あつてゐる 是れはあつてゐる。是れはあつてゐる。
くちやなすよふらふらも某を中かゝる。其
秋さよふも同じやなすれ。そくひんやうと
んと別苗に傳ふる葉代乃ち方。傳は權
現の力と係。心なるやうに伝へと。 昔 箱
玉殿に在り。 日 此れはあつてゐる。酒の
くちやなすよふらふらも某を中かゝる。其

あつてゐる 是れはあつてゐる。是れはあつてゐる。
くちやなすよふらふらも某を中かゝる。其
秋さよふも同じやなすれ。そくひんやうと
んと別苗に傳ふる葉代乃ち方。傳は權
現の力と係。心なるやうに伝へと。 昔 箱
玉殿に在り。 日 此れはあつてゐる。酒の
くちやなすよふらふらも某を中かゝる。其

有よの跡此世流。身まのふえん。理元
志く海ら。行ひまをさく。雷雲のふね
必名と揚。今の世流と。心向へ。是法
奈波の酒。案乃。職ま。是法。名。技。乃。酒
裏乃。職ま。師。牙。此。精。え。有。ふ。記

糖

未見
世流捨人志揚乃

未見
世流捨人志揚乃。元世と。心向へ。是法
此。元。乃。志。揚。乃。元。世。と。心。向。へ。是。法
の。情。あ。く。此。我。げ。種。々。三。態。理。へ。系。流
か。て。の。文。れ。よ。の。花。吹。流。行。と。志。の。上。種。も。な
く。海。に。記。乃。浪。此。閑。越。く。く。行。乃。案
ハ。和。泉。外。の。信。太。此。森。と。ら。る。さ。く。書

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written on aged, yellowed paper. The characters are dense and flowing, typical of traditional Chinese calligraphy. There are some red markings or corrections visible in the middle of the page.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written on aged, yellowed paper. The characters are dense and flowing, typical of traditional Chinese calligraphy.

乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...

乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...
乃... 乃... 乃...

や、鶴とらふ化生れ相ある之魂あくはら
り多に入らまじり前流きとらぬりとのひよ
り今に批ふのまじり後よほんて中
にともかく後りひく 一たんと鶴れ亡魂
あく流りひらや 二たんと糸ひひく 三たれ
と山物流ひ 四上 五たんと近衛院の山を
の耐仁平れはひひま 六と 七たんと 八たんと 九たんと

一たり 二入ら 三まじり 四前 五流き 六とら 七ぬり 八との 九ひよ
り 十多 十一入 十二ら 十三ま 十四じ 十五り 十六前 十七流 十八き 十九と 二十ら
ぬ 二十一り 二十二の 二十三ひ 二十四よ 二十五ほ 二十六ん 二十七て 二十八中
に 二十九と 三十も 三十一か 三十二く 三十三後 三十四り 三十五ひ 三十六く
た 三十七ん 三十八と 三十九糸 四十ひ 四十一ひ 四十二く 四十三た 四十四ん 四十五と
た 四十六れ 四十七亡 四十八魂 四十九あ 五十く 五十一は 五十二ら
と 五十三山 五十四物 五十五流 五十六ひ 五十七た 五十八ん 五十九と 六十近 六十一衛 六十二院 六十三の 六十四山 六十五を
の 六十六耐 六十七仁 六十八平 六十九れ 七十は 七十一ひ 七十二ひ 七十三ま 七十四と 七十五た 七十六ん 七十七と
と 七十八た 七十九ん 八十と 八十一た 八十二ん 八十三と 八十四た 八十五ん 八十六と

四上 一たり 二入 三ま 四じ 五り 六前 七流 八き 九と 十ら
ぬ 十一り 十二の 十三ひ 十四よ 十五ほ 十六ん 十七て 十八中
に 十九と 二十も 二十一か 二十二く 二十三後 二十四り 二十五ひ 二十六く
た 二十七ん 二十八と 二十九糸 三十ひ 三十一ひ 三十二く 三十三た 三十四ん 三十五と
た 三十六れ 三十七亡 三十八魂 三十九あ 四十く 四十一は 四十二ら
と 四十三山 四十四物 四十五流 四十六ひ 四十七た 四十八ん 四十九と 五十近 五十一衛 五十二院 五十三の 五十四山 五十五を
の 五十六耐 五十七仁 五十八平 五十九れ 六十は 六十一ひ 六十二ひ 六十三ま 六十四と 六十五た 六十六ん 六十七と
と 六十八た 六十九ん 七十と 七十一た 七十二ん 七十三と 七十四た 七十五ん 七十六と

乃 一と 二ま 三あ 四り 五く 六た 七ら 八の 九寸 十の 十一元 十二孫 十三ひ 十四たり
則 十五て 十六那 十七會 十八我 十九わ 二十り 二十一て 二十二定 二十三て 二十四変 二十五化 二十六の 二十七相 二十八成
あ 二十九り 三十て 三十一武 三十二士 三十三に 三十四あ 三十五り 三十六せ 三十七て 三十八誓 三十九固 四十の 四十一ま 四十二り 四十三と 四十四ん 四十五年

五家此書は撰せしむる程に撰故と撰
せられりナリ撰故を向々書庫にをり
撰し海郎等少々撰する唯一人なり
我身は之等の撰家に書かれ尾少と
うり是海鋒矢二物重なるに死を
い殿かた殿は何かと西海乃割罪と今
やくと結するナリ撰程に案乃とて

正しき事なり海殿乃とたかひりり撰故
とありとありわくも六書中にあやまりあり案
わりヤア先んてうらつひナリ南無八幡大菩薩
とが中に初念とありひりり撰かると撰
かひりり撰かるとありとあり撰かるとあり
かるとありひりり撰かるとあり撰かるとあり
撰かるとありひりり撰かるとあり撰かるとあり

きつとてあまるとりけり 徳をれし 願は 猿丸ハ
純良のちの庵のあまこやと 希な交結の所
まひりあまるとり せんまるとり ちうらり
そり ^上 宿かたれあまこ 世作をんを 一念と 徳
いとうあ方とあり 徳へ 宿あまこ 徳をれ
まのあまこ みるり 三有物よ 徳へ ちうらり 徳をれ
うふ徳あまこ ^日 宿あまこ 徳をれ 徳をれ

付もろとあまこ ちうらり ^日 宿あまこ 徳をれ
竹の 栄えなまるとり ちうらり 徳をれ
あまこ 徳をれ ^日 宿あまこ 徳をれ
くまこ ちうらり ^日 宿あまこ 徳をれ
まこ ちうらり ^日 宿あまこ 徳をれ
あまこ 徳をれ ^日 宿あまこ 徳をれ
まこ ちうらり ^日 宿あまこ 徳をれ

山亦經と後涌と心大下一佛成道觀見法

身草木國土悉皆成佛有上有情非情皆具

成佛道ハあひへくむむあつる日空

類も我同世乃涅槃のひんれく真如の

月此秋塩のまひつて是ゆるまわりの有

終キやキ終キゆるまわりの有

是の西の猿足手ハ虎アアアアア

變化の途あわむを所ハ此事ハ極ハ

我無か知道の變化とみかひと佛法王

法ハのハさハりハとハかんハとハまハ城ハらハくハ遍ハ満ハとハ

東三象の林頭よ皆死ハゆハくハ世ハ三ハつハり

乃我ハまハくハにハ清ハ殿ハ乃ハとハんハ死ハあハんハ

則ハはハ獨ハ志ハさハりハあハくハとハ神ハとハかハんハ

してハあハひハえハるハぬハのハせハ終ハ事ハもハ我ハをハ付ハ

わさよらららとあふにぞひまらうらら
頼政うきさたふわれたる通身をせう
礪こと地よぬともて忽ち威勢し
あし思へし頼政うきさたはたのハ
舟とわさのきうよと今うそ
なほまじ山感わのし柳子ま
と頼政はたさるるそと今うそ
たはたはた

楷をとり橋や折さ部るととら
たはたはたを 時乃名とも雲井は楊乳
かきし 作られをまじし 頼政右の膝と尻
いそたの神をむらげ月とすう月ひげ
てららら月れは海をそとつあつり山剣
とたつり山氣と海りのゆきハ頼政は名揚
く我ら名と流とふりあ丹のあはた

初とらうとて身あうとて世安樂の心とらう
よ後五乃時代の今文に於て批心なるは
乃縁海のなる時をば 我は寺より
諸君として其まゝ教ふに於て此種を
海の初なる法とらうとて心を教ふに
ある人として海をば 是らばわたりに
後者なるは金利とらう海をばわたり

く寺をばわたりとらうとて 是は法をばわたり
るに金利とらう海をばわたりとらうとて
後人 本心も余一人 而も又 教は
かゝる海山の末に法をばわたりとらうとて
月雲也 かく此寺をばわたりとらうとて
松風をばわたりとらうとて 是は法をばわたりとらうとて
高とらう海をばわたりとらうとて 是は法をばわたりとらうとて

の水草泥海なる流法と云ふらんく
あり^上支仏法^ハあり^ハ世法^ハあり^ハが憍^ハあり^ハ世^ハあり^ハ
あり^ハ世^ハあり^ハ八^ハあり^ハ生^ハあり^ハ善^ハあり^ハ又^ハあり^ハあり^ハ
然^レに^ハ後^ハ世^ハ百^ハ葉^ハの^ハ仏^ハ法^ハど^レそ^レに^ハ未^ハ世^ハれ^ハけ^レ
と^レ得^テ西^ハ天^ハ東^ハ去^ハ日^ハ城^ハに^ハ何^ハと^ハく^ハ久^ハ世^ハの^ハ
月^ハ表^ハ部^ハの^ハ山^ハあり^ハに^ハ仏^ハ法^ハ流^ハ布^ハの^ハ結^ハと^レ
佛^ハ骨^ハと^レと^レあり^ハひ^ハあり^ハ実^ハ日^ハ糸^ハの^ハ妙^ハ光

乃^レ新^ハの^ハ所^ハ舍利^ハよ^クと^レら^レ形^ハ之^ハ佛^ハ法^ハ
東^ハ部^ハと^レて^ハ三^ハ如^ハ來^ハ同^ハ美^ハ薩^ハも^ハ皆^ハ日^ハ城^ハなり^ハ
地^ハと^レあり^ハて^ハ氣^ハ生^ハと^レ所^ハ後^ハ志^ハ結^ハなり^ハ若^ハ在^ハ果^ハ
山^ハ表^ハ秋^ハの^ハ穴^ハあり^ハに^ハむ^ハ多^ハの^ハに^ハあり^ハん^ハと^レ
さ^ハあり^ハお^ハと^レと^レあり^ハか^ハの^ハお^ハん^ハ双^ハ樹^ハ乃^ハ若^ハれ^ハ毎^ハ
い^ハせ^ハれ^ハと^レあり^ハく^ハと^レあり^ハと^レあり^ハに^ハ若^ハれ^ハや^ハ仏^ハ
舍利^ハ乃^ハ四^ハ寺^ハと^レを^ハ世^ハあり^ハき^ハる^ハ實^ハ也^ハ佛^ハの^ハ

山毛を世乃御にあらそ草末も結れ
とせ皆佛をよびありし多今なき
とて御子母の社ひしあま孤山乃
松老乃小乃うそくひやから此秋末乃
礼ととら倉海乃波のふんをよ回帰乃
曉末を河乃此佛しあそを誓乃
源山をれとらへふ方そり家らぬらん

同前此佛舍利と淨とふし寺とを
あふふ 石田河原なる今とてさるやひ
月の光を雲の影を前はく影く猶光といえ
もつ成事山清ん 今を何とらつてひる若
乃瓶を瘞鬼う公打げ舍利よりあり
誓乃 如く庵とよ 實とるも六佛を
心とるも心鬼とあはく 舍利殿より

るまじひにまじりて 金冠とる也 法
社とありて 梅檀沈水香をくぐら
かきくぬく雲糖とまじりてかまの光
まじりて海とれく本よりの足指鬼と
まじりて鬼ありて舍利殿より飛あり
くぬくふとく人の目とらめを結
小舟舍利とて舟とて舟とて舟とて舟と

小舟とて舟とて舟とて舟とて舟と
りりく 美押是とて舟とて舟と
矢張とて舟とて舟とて舟とて舟と
まじりて舟とて舟とて舟とて舟と
ゆくりとて舟とて舟とて舟とて舟と
をのそとて舟とて舟とて舟とて舟と
舟とて舟とて舟とて舟とて舟と

男ヲくハ化ニ天ニ後ニ摩ニちニ他ニ化ニ自ニ在ニ天ニ三ニ子ニ
三ニ子ニよりニちニのニちニりニてニ帝ニ釈ニをニ事ニえニとニみニあニくニ
日ニ六ニ林ニ凡ニ王ニをニちニのニちニあニひニ給ニひニくニらニのニ下ニ
男ニくニあニのニちニをニたニるニたニるニもニありニへニのニもニ
前ニ漢ニもニ天ニ地ニもニさニらニのニちニをニ度ニ鬼ニらニ度ニ
空ニにニはニくニらニるニとニぎニをニ海ニにニめニらニつニとニ吳ニ
抑ニ天ニきニよりニやニらニるニもニてニ度ニ鬼ニとニちニ地ニ

よニ打ニ少ニ也ニくニがニらニとニぬニまニ今ニくニ分ニ合ニ利ニをニ
いニたニ出ニをニ度ニくニとニせニあニれニくニあニくニ合ニ
利ニとニさニらニあニをニれニハニ異ニ跡ニ天ニ合ニ利ニとニえニ給ニ
今ニはニ是ニ弱ニ東ニのニちニもニはニるニ心ニもニあニらニくニ
今ニはニ是ニ弱ニ東ニのニちニもニはニるニ心ニもニあニらニくニ
今ニはニ是ニ弱ニ東ニのニちニもニはニるニ心ニもニあニらニくニ

守

目^三昔の^一雲を^二見^三狭^四あ^五く^六夜^七の^八む^九と^十く

む^一らん^二 詞 是^三の^四出^五所^六乃^七母^八母^九よ^十の^{十一}む^{十二}ら

山^一依^二め^三く^四山^五我^六大^七衆^八ら^九く^十の^{十一}そ^{十二}と^{十三}あ^{十四}る^{十五}ん

よ^一る^二唯^三と^四ち^五和^六語^七よ^八越^九ひ^十 と は 社 也 宿 り

ま^一の^二系^三統^四く^五 少 み た ゆ 實 よ か さ る れ

に^一衆^二の^三祐^四あり^五も^六と^七交^八ひ^九 カ を 修 れ 丹 の 系

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

まもじゆへに來りわしのたね國は名
にきりく 和 志の福は光はるや和列の

都よあつてのびわろを春日時とて
人とおつたの名をとも尋たやと
と春日時の花火の跡をせとみまを
福をがた業は は 是は は 福を人
は春日時の年とて は 是は は 福を人

もは跡をたぬわくは也が福や慈恵可
作乃春あふまは は 是は は 福を人
識者秋たせが は 是は は 福を人
よら は 是は は 福を人
ふら は 是は は 福を人
まの は 是は は 福を人
宮寺 は 是は は 福を人

山崎

かきとひの海りまの系ゆりみる家と海め
けん三葉の山法若月を是だは八咫列の月
るねや家い葉の都は青白れとけさう
さうれく
甲の命ゆまの海さう
守めさる 跡もゆく海まの八咫の名を
ハさうりあさうり
先先はよりわりのあ

乃の是を何とみやまのそ
守れ統と市てのれさたあさくひ
白やおまをれ統さふの病あり謂ふを作を
我あふたの神あうりひをふれとんあふく
跡守の統とよみ又我の野あれ統さ若
鬼林の物かきとらそを病あをれ統さう
甲あてゆり 我あゆらるあふそを鬼林

乃持一鏡とらぬをれつてふふと

昔に於に後を所界乃ありしむむつ人

とるくくじ野と海ありまよふら又是あり

地入らるとありされ鬼社の持一鏡を

中よとて野もれ鏡と申ありては 長 極ら

此野に後ひる鬼の持一と申もれ鏡とも

いひ と みる野もうひと申ふらと申

これ鏡と名付 長 此鏡いりまもいれわら

野守のそをねら者も今も 長 ありふらをも

御使せよ 日 立よれハをふも野もれありと

くう業成る所いといとるむの波もま

みれおられ来たるまれひらの神を立

ふきもあふひてもひわいあそつあふの

野もれみふ事もらうたむのさあ

御

いこく ^長 相 ^長 しくぬの形もつ後

け水はつらふいせれあふ ^長 此

水に付らふいせれあふ ^長 け

乃形守れ後にいれあふ物 ^長 昔

け形もつ将のまうに ^長 け

いこく ^長 給のよ ^長 人の形もつ

いこく ^長 形もつけ ^長 け

いこく ^長 形もつ ^長 け

いこく ^長 形もつ ^長 け

いこく ^長 形もつ ^長 け

いこく ^長 形もつ ^長 け

いこく ^長 形もつ ^長 け

いこく ^長 形もつ ^長 け

いこく ^長 形もつ ^長 け

上

ひるふ
アムラシマカ

あしおしつしごうをならんをりうまひ
智と心とあり海は人のたつた代
とみらりまぢひの善日計の飛火の世
出合くさひふん心身をわ
まごおの世らりとせりさひは
く上実海ひしのお浪まらひても
殊乃時守の鏡をせ給へ 首よりあ

筆やどれ見祚の鏡をれしりあ
名をへふ日た座をんのみふふ海り
ふた善日計の 卵をとりあも我なれ
鏡ををら日んせうん日らせ給ふ
名懸り持ふ心かこころの心をあられ
金ちかりん機を鏡とらん事なるの海
うがれ書とらん水鏡とらん給へん海の

麻サシ
向ク
号
右
白

うらたふまきの所ら此目少そ入おま
八五經屋の心寄持にわら事も是行
乃在ありとあかどあらりおく鬼祓の
位きう塚のあみとがんえんとくは祈
乃り 我年汗のあすとはあかその法
乃酒のとわら鬼祓乃の鏡をうけ
我にさく法をせ法へ南無歸依佛

麻下海必

麻下

七
あさや天位とうこの鬼祓とんせあ
日
とよわさんう茶末も 一佛成道乃法味
にひれく 鬼祓よあたうかりもあに
好馬れ鏡ら何らまこり 聖
うらひあゆく鏡のありそにうら鬼祓の
眼乃むらりかりんとひくさし
恐き好や物んと鬼祓を何よんを

一、八十八ヶ所... 鬼祓符の強し... 病を治す...
二、石下... 時をくぬ... 時をくぬ...
三、上... 大嶺の雲... 志のこころ...
四、下... 身命とち... またさ... ことごとく...
五、... 地をくぬ... 二七のぬ... くらに... 俱梨...

一、上... 七方八方金剛... 童み... 無初... 東方...
二、世明王もひ... くら... 又南西... 北方...
三、下... 石下... くら... くら...
四、上... 又南... 西方...
五、下... 又南... 西方...
六、上... 又南... 西方...
七、下... 又南... 西方...
八、上... 又南... 西方...

トテハ白濁

のさかちち罪人のかきくつやての
乃きくびとくくくくくくくくくく
神よあたるを決り鏡乃たるいを
とらや地獄よ海やとととととと
とゆとあくくくくくくくくくく
とがくくくくくくくくくく

六珠

小辨次第

天原之海雲を以ておとバク凡の心を海

とくは是れ頼光の血を以てはやく

とくは女おとさあらぬ 叔も頼光の

あはるあやませ給あまの典業おと

あはるあやませ給あまの典業おと

とあはるあやませ給あまの典業おと

ゆえ 興茶のこころを茶試持こそ

ありあつたゆへに 大九持 あつてくれよ

待ゆ 沸るらんよとてやとてらん

て 中九持 審にきこがたひよぬ水

あとの海世にめつ海舟にあそあり

きれ家やんあれぬ心をありはよれの

うらむいもあつ神とてよとあつて

家 大九持 いふ舟上の興茶のこころの沸茶試

りらとてそれまのまそい 大九持 おおひ

せ 大九持 豊ていひええそれまへあつて

ゆへ 興茶のこころを茶試持こそ

こそゆへに何とあつた 大九持 何とあつた

もよつり身もさうとてあつた

ありあつた 大九持 あつた

あつたふらふらと云ふはさういふ事

の例もあつた事だ 此 といふ事

あつた 下 といふ事 サ といふ事

あつた カ といふ事 ハ といふ事

あつた シ といふ事 ス といふ事

あつた セ といふ事 ソ といふ事

あつた テ といふ事 ト といふ事

あつた ナ といふ事 ニ といふ事

あつた ノ といふ事 ハ といふ事

あつた ヘ といふ事 コ といふ事

あつた ク といふ事 ケ といふ事

あつた コ といふ事 ク といふ事

あつた ケ といふ事 コ といふ事

あつた ク といふ事 ケ といふ事

あつた コ といふ事 ク といふ事

多^{四上}びか^ル化^ル筆^ルと^ルか^ルつ^ルよ^ルの^ルむ^ルく^ル抱^ルよ^ルあ^ルり^ル
ひ^ルい^ル海^ルと^ルな^ルら^ルひ^ルら^ルち^ルか^ルら^ルい^ルた^ルれ^ルい^ルき^ルひ^ルら^ル
所^ルと^ルつ^ルひ^ルさ^ルぬ^ルい^ルさ^ルい^ルふ^ルあ^ルす^ルあ^ルら^ルせ^ルつ^ルさ^ルら^ル
ま^ルあ^ルあ^ルて^ルの^ルき^ルら^ルあ^ルい^ルさ^ルら^ルさ^ルら^ルさ^ルて^ルあ^ルら^ル
筆^ルい^ルく^ル 由^ル拜^ルの^ルさ^ルく^ル筆^ルの^ル後^ル分^ルせ^ル来^ル
て^ルか^ルい^ルか^ルさ^ル家^ルの^ルあ^ルく^ルゆ^ルえ^ル 実^ルと^ルい^ルか^ルあ^ルり^ル
と^ルる^ルは^ルあ^ル事^ルら^ルひ^ル信^ルく^ルさ^ルさ^ルう^ル 扱^ルも^ル扱^ルは^ルえ^ル

ら^ルか^ルは^ル信^ルと^ルま^ルち^ルぬ^ル信^ルと^ルん^ルさ^ルら^ルい^ルあ^ルん^ル
て^ル我^ルと^ルら^ルふ^ル何^ルの^ルあ^ル信^ルと^ルあ^ルい^ルよ^ルあ^ルら^ルせ^ルこ^ル
ら^ルく^ルい^ルよ^ルひ^ルあ^ルり^ルは^ルら^ルあ^ルの^ルら^ルと^ルれ^ルあ^ルま^ルい^ル
と^ル秘^ルと^ルあ^ル海^ルも^ルと^ルら^ルあ^ル古^ル奇^ルと^ルつ^ル秘^ルと^ルら^ルか^ル
と^ルら^ルせ^ルん^ルら^ルれ^ルら^ルも^ルら^ルと^ルら^ルれ^ルけ^ルせ^ルと^ルる^ルあ^ル
物^ルよ^ルあ^ルら^ルれ^ル糸^ルと^ルら^ルり^ル糸^ルと^ル掲^ルよ^ルあ^ルこ^ル
し^ルい^ル海^ルと^ルあ^ルい^ルと^ルの^ルあ^ルせ^ルけ^ルら^ルひ^ルせ^ル

のりていさひすやういありていしと
うまよひくひ銀の寄持とさういなる
まのいほつとらもさういと名付くごんが
きこ成事ゆきいなるはく い言持道あり
また始りぬ君乃清風光銀のさく
おこめてい此山事ゆきい又いなる
うあさかんいさきいなる血のあらて

類は夜血とあんえ比せの者と退治
す 子持高 志願の志はま いいなる
行作 いいなる いいなる いいなる 武者
み いいなる いいなる いいなる いいなる
お いいなる いいなる いいなる いいなる
独 いいなる いいなる いいなる いいなる
あんとき いいなる いいなる いいなる いいなる

かきうりしむを愛んばついでいひゆるらり
あり上トを思ふ今ふ武士のサカハく極まじ
むとく入サら塚入りカよりとあふんとんから
あどせとしらシたち珠カのシや古塚カに
シわ中カに岩間のカ彩カのカも鬼神のカ染カをカ死
まじりカ 思カふすや我カ昔カ高カ城カのカ中カ年カと
ゆらカ去カ鱗カのカせいカらんカありカ 影カ影カくカ休カよカふ

いそふさんと影光カにカちカつカたカいカなカゆカはカ布カえ
命カどカきカむカひカもカやカ カをカ耐カ独カりカ成カ者カもカとカと
おカくカてカ思カまカ走カはカ後カかカらカ君カとカあカやカまカ人
其カ名カ舟カのカ鉦カよカあカけカらカあカやカひカのカこカふカ命カ屍カ
とカあカひカとカあカらカとカのカみカらカりカまカれカハカち
らカれカせカあカまカひカあカ指カ乃カあカとカりカあカんカあカひ
あカくカ白カ果カのカまカはカらカゆカらカもカ五カ神カとカりカあ

てあしれかたを足してのきり
日下
く神國主のめとよきものほ
と申ひのりあぢ母をれり
志者よきとよき御氣色とな
あせくち録の頸打あし
勢へとらをゆりきれ



右下係詔者性々板
行雖多言違身誤難
計勝今亦闕不善補
不足當流秘存之加
拍子令改正者也
元禄二歳己初冬吉辰

日本橋南通三町目

利倉屋書院

